

いつものじいちゃん

福井大学教育学部附属義務教育学校

八年 村中希光

私は昔からのじいちゃんっ子で、生まれた時から一緒に住んでいる。じいちゃんは私が小学校低学年の頃から体が悪く、透析に通っているので、ずっと元気でいられるとは限らないということは父から聞いていた。一ヶ月ほど前、心臓が悪くなりバイパス手術を受けることになった。上手くいくだろうと思っていたし、私たち家族はじいちゃんの入院をそこまで重く捉えずに、皆で退院を待っていた。手術が終わって数日後、手術が成功したと聞いてほっとしたが、同時に、じいちゃんの異変について知らされた。手術をすると、「せん妄」という、幻覚が見えたりする精神的な病気になることがあるそうだ。じいちゃんはその病気になっていた。調べたら、長くても数週間で治ると書いてあったので、「すぐによくなるだろう。」と思っていた。退院してからは、時間があるたびに、じいちゃんの部屋に話しに行った。特に変だというのは思わず、久しぶりに会えて嬉しい気持ちでいっ

ばいだったが、異変を感じる日が来た。

ある日、部活から家に帰ると、みんながじいちゃんと言いつ争っていた。じいちゃんは、「みんなおれがする話をおかしいって言うんだ。」と言うが、話を聞くと、明らかにありえない話だった。事実だということを証明するために電話をかけようとしていたため、家族みんなで止めていた。私たちが信じなかったためにじいちゃんはカッとなっていき、怒っているようだった。ずっとじいちゃんの対応をしていた兄はショックを受けたのか、きつい言葉を言いながら泣いてしまった。じいちゃんは自覚がないため、家族がどんな言葉を投げかけても、「本当のことだ」というだけだった。私はどうするべきか分からず、ごまかしながらじいちゃんを部屋に連れて行つた。またある日は、夜中にじいちゃんがリビングに来て、「部屋のテレビが入らなくなったから、こっちのテレビを消せば入るはずだ。」と言ってリビングのテレビを消そうとした。そんなことは起こるはずもなく、じいちゃんにはリモコンの使い方もわからなくなっていたのだ。そんなやりとりをしながら、夜中に何回も、足が悪く上れない階段を上ろうとするので、その度に、「部屋に戻ろう。」と十回以上連れ戻した。何回言っても上ろうとするので、階段から落ちないか心配で寝るわけにはいかな

かった。初めは心配だという気持ちが大きかったが、毎日繰り返すことで、徐々にめんどくさいと思うようになった。リモコンの使い方も、初めはわかりやすく説明したり、使い方をイラストで書いてみたりしたが、しまいには「もう次は直さないから!」と冷たくしたり、無視したりしてしまうこともあった。最近では、「何でわからないの!」と怒ってしまうことも増えていった。私以外の家族も同じように、じいちゃんのおかしいことを指摘したり、怒ったりすることが増えていった。皆がじいちゃんにどのような関わっていいのかわからなかったのだ。「わからない」ことで、じいちゃんを傷つけていたのだ。

ある日いつものようにじいちゃんの部屋に行くと、エアコンで寒そうだったので、布団をかけた。すると、じいちゃんが、「本当に優しいな。ありがとう。」とにこやかに笑ってくれた。冷たい態度をとっていたのに笑ってくれて、私は、驚きや喜び、罪悪感を感じたし、「あ、じいちゃんだ。」とも思った。手術をする前は、大きな声で笑ってくれていたけど、退院してからはあまり笑顔を見せてくれなくなっていたからだ。よく考えれば、おしゃべりなところも野球がすきなところも、時々優しく声をかけてくれるところも変わっていないと思った。そ

れまでは表面的に変わってしまったところばかりをみてしまっていたから気づけなかったのだと思う。

「変わっちゃったな」ではなく「変わってないな」と思えるところを探して、向きあっていくのが私たちのすべきことかなと思った。大体の人は少し前の私のように変わってしまったところや人と違うところを探してしまうのだと思う。しかし、そこでその人の本当の人柄や変わらないところに気付くこと、変わってしまった部分も認めることが大切なのだと感じた。また、自分のことを否定されることは、誰もが傷つくことで、誰も人のことを否定してはいけない。それは、おかしいことを言うようになったじいちゃんに対しても同じだ。間違ったことをしている時にも否定もせずにならるか自信はないが、「自分がされて嫌なことはしない」ということを忘れずに、優しく根気強く話をしていきたいと思う。じいちゃんは私にとってたった一人のじいちゃんだ。これから、今のじいちゃんの全てを受け入れて、家族皆で協力しながら、しっかりと向き合っていきたい。